

重症多形滲出性紅斑に関する調査研究

研究代表者 森田栄伸 島根大学医学部皮膚科 教授

研究要旨

本研究では、Stevens-Johnson 症候群 (SJS) 及び中毒性表皮壊死症 (TEN)の診療ガイドラインの作成及び普及を図ることを目的として研究を実施した。2014 年度は、本研究班で 2005 年に作成した SJS 及び TEN の診断基準に病理組織所見を加えた改定規準を作成した。2015 年度は、改定診断基準、新たに保険適用になった免疫グロブリン大量静注 (IVIg) 療法を加えた改定治療指針、クリニカルクエスチョンと推奨文などを加えた包括的な診療ガイドラインを作成した。2016 年度は、日本皮膚科学会理事会での承認を経て、日本皮膚科学会雑誌第 9 号に診療ガイドライン全文を掲載した。さらに、SJS 及び TEN の診療ガイドライン 2016 (簡易版) を作成し、日本皮膚科学会会員に配布した。

SJS/TEN の発症背景を明らかにする目的で、患者および対象者の HLA 解析を行い、アロプリノールによる SJS/TEN では HLA-B*58:01 の保有率が有意に高く、また近傍に存在する TNF- α 遺伝子多型と連鎖して重症化に関与している可能性が示された。ラモトリギンによる SJS/TEN では関連する HLA は見出せなかった。

治療法と予後についての検討では、SJS/TEN に対するステロイドパルス療法の有用性を検証する目的で、平成 20 年度に本研究班で集積した SJS/TEN 323 例の解析を行い、ステロイド大量療法群よりステロイドパルス療法群の死亡リスクが低いことが示された。SJS/TEN 急速進行例に対するステロイドパルス療法の有用性を確認する前向き臨床試験のプロトコールを多国間で検討した。京都府立医大を受診した眼病変を有する SJS/TEN 7 症例の治療法を解析し、眼症状の後遺症予防に発症初期のステロイドパルス療法が有効であることが示された。横浜市立大学病院を受診した SJS/TEN 100 例の解析から死亡率が経年的に低下していることが示され、SJS/TEN における複数の治療法の組み合わせの有用性が示唆された。京都府立医科大学を受診し、視力測定できた SJS/TEN 220 例の眼後遺症を検討した結果、最良矯正視力が 0.1 未満の症例の割合は 1981 年～1985 年で 73.3%と最大を示したが、1991 年以後徐々に減少し 2006 年以降では 22%に留まっていることが示された。

重症薬疹の危険因子やバイオマーカーを検索する目的で、マイコプラズマ感染症の関与、感作モデルマウスの T 細胞除去機序の解析、感作リンパ球の産生する蛋白質の網羅的解析を行った。

重症薬疹における原因薬同定の精度の向上の目的で、薬剤誘発リンパ球活性化試験と好塩基球活性化試験の有用性を検証した。

重症多形滲出性紅斑関連疾患である薬剤性過敏症候群 (DIHS) の診断における血清 TARC 値測定の意義、ステロイド治療が内在性ウイルス再活性化に与える影響、シクロスポリン療法の有用性の検討を行い、DIHS の診断において血清 TARC 値測定が極めて有用であること、DIHS への早期のステロイド治療はヒトヘルペスウイルス 6 の再活性化を抑制するが、ステロイド治療はサイトメガロウイルスの再活性化を増強すること、DIHS への短期シクロスポリン療法は有効であることが示唆された。

分子標的薬や生物学的製剤の投与時にみられる皮膚障害の実態調査および発症機序の解析を行い、分子標的薬の中止には手足症候群の発症の頻度が高いこと、免

疫チェックポイント阻害薬による薬疹の発症に抑制性 T 細胞が関与することなどが示唆された。

研究分担者

佐山浩二・愛媛大学医学部皮膚科学教授
相原道子・横浜市立大学大学院医学研究科
環境免疫病態皮膚科学教授
末木博彦・昭和大学医学部皮膚科学主任教授
浅田秀夫・奈良県立医科大学医学部皮膚科学教授
椛島健治・京都大学大学院医学系研究科皮膚科学
橋爪秀夫・市立島田市民病院皮膚科学副院長
阿部理一郎・新潟大学大学院医歯学総合研究科皮膚科学教授
高橋勇人・慶應義塾大学医学部皮膚科学専任講師
青山裕美・川崎医科大学附属川崎病院教授
黒沢美智子・順天堂大学医学部衛生学准教授
蓮田泰誠・独立行政法人理化学研究所統合生命医科学研究センターファーマコゲノミクス研究グループグループディレクター
外園千恵・京都府立大学大学院医学研究科視覚機能再生外科学教授
大山 学・杏林大学医学部皮膚科
小豆澤宏明・大阪大学大学院医学系研究科助教（現奈良県立医科大学医学部皮膚科准教授）

A. 研究目的

本研究班では 2005 年に SJS 及び TEN の診断基準を作成したが、この診断基準では多形紅斑重症型（erythema multiforme major: EM major）との鑑別が困難で、SJS/TEN の確定診断に EM major がしばしば混同されてきた。また、海外の SJS/TEN の診断基準との比較において水疱・表皮剥離面積に相違がみられていた。本研究班では、こうした点を鑑み、診断基準の改訂版を作成するとともに、新たに SJS/TEN に保険適用になった免疫グロブリン大量静注（IVIg）療法を加えた改定治療指針及びクリニカルクエストを加えた包括的な診療ガイドラインを作成することを目的とした。さらに作

成した診療ガイドラインは関連皮膚科学会での承認を得て公開するとともに、一般臨床医への普及を行うことを目指した。

本診療ガイドラインに掲載された治療法の有用性を検証することを目的としてステロイド療法などの既存の治療法の検証を行った。また、SJS/TEN 発症予防法の確立を目的として、SJS/TEN 発症における遺伝的背景やバイオマーカーの検索を行った。

さらに、SJS/TEN の関連疾患である薬剤性過敏症症候群（DIHS）の診断精度の向上、診療ガイドラインの作成を目的として、バイオマーカーの検索、ステロイド治療の有用性の検討などを行った。

B. 研究方法

1. SJS/TEN の診療ガイドラインの作成、承認と普及

研究班内にワーキンググループを設置し、診断基準の精度の検討と改定、海外の診断基準との比較、新規治療法の検討、クリニカルクエストの設定と推奨文の作成を行った。本研究班にて作成した SJS/TEN の診療ガイドラインを日本皮膚科学会理事会へ提出し、その承認を経て日本皮膚科学会雑誌への投稿を行った。さらに、一般臨床医への普及を図るため、SJS/TEN の診療ガイドライン 2016 の要点をまとめた簡易版を作成し、学会会員などに配布した。

2. SJS/TEN 発症の遺伝的背景の検討

島根大学医学部附属病院を受診したアロプリノールによる薬疹 8 例及びアロプリノール耐性症例 24 例、理化学研究所に研究班から集積されたアロプリノールによる薬疹 21 例及びカルバマゼピンによる薬疹 101 例を対象として、HLA-B*58:01 及びその近傍に位置する TNF- α 遺伝子多型（プロモーター領域-308 番目および-238 番目）との関連を検討した。理化学研究所で集積したラモトリギンによる薬疹 14 例について HLA-A、B、C 及び DRB1 のタイピングを行った。

3. SJS/TEN に対する治療法と予後についての検討

平成 20 年度に本研究班で集積した SJS/

TEN 323 例について、ステロイド大量療法群及びステロイドパルス療法群のステロイド投与量とステロイドパルス療法後のステロイド投与量、予後、後遺症について検討した。

SJS/TEN 急速進行例に対するステロイドパルス療法の有用性を確認する前向き臨床試験のプロトコールを多国間で検討した。

横浜市立大学附属 2 病院を受診した SJS/TEN100 例を対象として、患者背景、基礎疾患、皮膚粘膜所見、臓器障害、治療法、転帰について検討した。

京都府立医科大学を受診し、視力測定できた SJS/TEN220 例の眼後遺症を検討した。京都府立医大を受診した眼病変を有する SJS/TEN7 例の治療法を解析し、眼症状の後遺症について検討した。

4. 重症薬疹の危険因子及びバイオマーカーの検索

新潟大学医学部附属病院を受診した重症薬疹患者 4 例及び通常薬疹患者 4 例の末梢血単核球に原因薬剤を添加し、5 日後の培養上清中の蛋白質を質量分析にて解析した。

重症薬疹のモデルとして、表皮に膜型オボアルブミンを発現する lvl-mOVA マウスにオボアルブミン特異的 T 細胞受容体を発現する OT-I マウスの CD8 陽性 T 細胞を移入し、その動態を解析した。

マイコプラズマ肺炎を合併した多剤感作症候群の症例を解析し、薬疹発症におけるマイコプラズマ感染の関与を考察した。

5. 重症薬疹における原因薬同定の精度の向上の検討

重症薬疹における原因薬剤の同定法を確立する目的で、慶応大学病院皮膚科を受診した薬剤アレルギー 234 例と健常人対照 16 例を対象として、薬剤性リンパ球活性化試験及び薬剤性末梢血好塩基球活性化試験の精度を比較した。

6. DIHS の診断と治療法の検討

DIHS の診断法を確立する目的で、DIHS 17 例において血清 TARC 値を測定し、臨床症状との関連を検討した。

DIHS 2 例に短期間のシクロスポリン投与を行い、その治療効果を判定した。

愛媛大学病院を受診した DIHS 20 例を対象として、ステロイドの投与とヒトヘルペスウイルス 6 及びサイトメガロウイルスの再活性化の有無を検討した。

7. 分子標的薬や生物学的製剤にみられる皮膚障害の実態調査

分担研究者の 11 施設で上皮成長因子阻害薬やマルチキナーゼ阻害薬を投与され、皮膚障害を生じた症例を集積し、その実態を調査した。

杏林大学病院を受診し、進行性悪性黒色腫に対してニボルマブを投与された症例の末梢血単核球をフローサイトメトリーにて解析した。

(倫理面への配慮)

本研究の実施にあたっては、試料提供者に危害を加える可能性は皆無であるが、各施設の臨床疫学研究審査委員会あるいは倫理委員会に研究計画を提出し、その妥当性の評価を受けた後、被験者に研究の目的と概要を詳細に説明し、同意を得たうえで実施した。

「薬疹の遺伝子多型解析」杏林大学医学部 (125-10)、島根大学医学部 (第 1670 号)、市立島田市民病院 (7)

「アレルギー炎症性皮膚疾患及びウイルス性発疹症の病態及び重症化因子の解明」杏林大学医学部(承認番号 077-08)

「薬疹・中毒疹のウイルス学的・免疫学的解析」愛媛大学 (1303010 号)

「重症薬疹の発症機序についての検討」昭和大学医学部 (870 号)

「薬剤性過敏症症候群におけるヒトヘルペスウイルスの再活性化の役割の研究」奈良県立医科大学 (195-6)

「炎症性皮膚疾患における皮膚等の組織浸潤リンパ球の解析」浜松医科大学 (第 E14-304 号)

「厚生労働科学研究 (難治性皮膚疾患政策研究事業) 重症多形滲出性紅斑に関する調

査研究班薬剤性過敏症症候群 (DIHS) の全国調査 (2013 年終了) 後の予後 (後遺症) 調査」順天堂大学 (第 2014145 号)

「カルバマゼピンまたはアロプリノールによる薬疹の遺伝子多型解析」京都府立医科大学 RBMR-G-106-1)

「Stevens-Johnson 症候群 (SJS) 及び中毒性表皮壊死症 (TEN) の眼合併症に関する調査研究」京都府立医科大学 RBMR-E-393-1)

「炎症性皮膚疾患の病型別病態解析とそれに基づく治療法の効果の判定」横浜市立大学 (B130704134)

実験への動物の使用は必要なものに限定し、可能な限り無駄な使用は避けるよう配慮した。また、動物実験は麻酔下を実施し、動物に与える苦痛を最小限にとどめるよう配慮した。

C. 研究結果

1. SJS/TEN の診療ガイドラインの作成、承認と普及

SJS/TEN の診断基準を再評価し、EM major との鑑別を明確にするために病理組織所見を、海外の SJS/TEN の診断基準との整合性をとるため表皮剥離 10~30% を SJS/TEN オーバーラップとすることを加え、改定診断基準を作成した。

新規に保険適用になった IVIg 療法を加えた治療指針を作成した。

クリニカルクエスチョンを 67 設定し、推奨文と解説を加えた。さらに疫学データ、各種資料を掲載した重症多形滲出性紅斑ステイヴンス・ジョンソン症候群・中毒性表皮壊死症診療ガイドラインを作成した。

この診療ガイドラインは、日本皮膚科学会理事会での承認を経て、日本皮膚科学会雑誌 2016 年第 9 号にその全文が掲載された。さらに、SJS 及び TEN の診療ガイドライン 2016 (簡易版) を作成し、日本皮膚科学会会員に配布した。

2. SJS/TEN 発症の遺伝的背景の検討

島根大学医学部附属病院を受診したアロプリノールによる薬疹 8 例中 4 例が HLA-

B*58:01 を保有し、さらにその 4 例の TNF- α -308 は G/A タイプであった。アロプリノールによる薬疹例はアロプリノール耐性例に対して有意に高い TNF- α -308G/A 保有率であった。TNF- α -238 位の遺伝子多型と薬疹の関連は見られなかった。

理化学研究所保有症例では、アロプリノールによる薬疹 21 例中 7 例が HLA-B*58:01 を保有し、そのうち 6 例が TNF- α -308 G/A タイプであった。両施設あわせるとアロプリノールによる薬疹 29 例中 12 例が HLA-B*58:01 を保有し (41.4%)、うち 11 例が TNF- α -308 G/A タイプ (37.9%) であり、TNF- α -308 G/A の重傷薬疹罹患に対するオッズ比は有意に高い値を示した。

ラモトリギンによる薬疹の発症リスクと統計的に有意な関連を示す HLA アリルは同定されなかった。

3. SJS/TEN に対する治療法と予後についての検討

平成 20 年度に本研究班で集積した SJS 223 例、TEN 100 例について、ステロイド投与量を検討した結果、ステロイドパルス療法群のパルス後プレドニン換算投与量の平均値は SJS: 50.0 mg/day、TEN: 89.7 mg/day であった。ステロイド大量療法群のプレドニン換算投与量の平均値は SJS: 52.2 mg/day、TEN: 81.9 mg/day であった。重症度スコア別の分析は各スコアの症例数が少なく困難であった。予後について、死亡は TEN でパルス療法と他の治療法を行なった 9 例

(30%)、後遺症は TEN でステロイド大量療法と他の治療法を行なった 11 例 (42.3%) とパルス療法と他の治療法を行なった 12 例 (40.0%) に多かった。多重ロジスティックモデルによる死亡リスクと後遺症リスク分析では、死亡のリスクを上げていたのは年齢、TEN、重症度スコアであった。死亡のリスクが低かったのは女性、ステロイドパルス療法であった。

SJS/TEN 急速進行例に対するステロイドパルス療法の有用性を確認する前向き臨床試験のプロトコールを多国間で検討し、そ

の研究計画書を島根大学医の倫理委員会へ提出し、承認を得た（第 2592 号）。

京都府立医大を受診した眼病変を有する SJS/TEN7 症例の治療法を解析し、眼症状の後遺症予防に発症初期のステロイドパルス療法が有効であることが示された。

横浜市立大学附属 2 病院を 16 年間に受診した SJS/TEN100 例を対象として解析した結果、16 年間の死亡率の平均は SJS: 1.6%、TEN: 12.5% であった。全期間を通じて患者の重症度はほぼ一定であったが、2006 年以前の死亡率は SJS: 4.7%、TEN: 23%、2006 年から 2012 年は SJS: 0%、TEN: 10%、2012 年以降では SJS: 0%、TEN: 0% であった。

京都府立医科大学を受診し、視力測定できた SJS/TEN220 例の眼後遺症を検討した結果、最良矯正視力が 0.1 未満の症例の割合は 1981 年～1985 年では 73.3% と最大を示したが、1991 年以後徐々に減少し 2006 年以降では 22% に留まっていることが示された。

4. 重症薬疹の危険因子及びバイオマーカーの検索

重症薬疹患者の末梢血単核球に原因薬剤を添加して培養し、通常薬疹の患者と比較したところ、重症薬疹に特異的に発現する蛋白質約 80 種が検出された。さらに約 10 種の蛋白質が病勢を反映する可能性が示された。

Ivl-mOVA マウスに移入したオボアルブミン特異的 CD8 陽性 T 細胞は、移入後 18 時間で激減した。この現象は末梢性クローン除去によると考えられ、重症薬疹の発症抑制の機序である可能性がある。

マイコプラズマ肺炎を合併した多剤感作症候群の解析から、薬疹発症におけるマイコプラズマ感染の関与が推察された。

5. 重症薬疹における原因薬同定の精度の向上の検討

薬剤性リンパ球活性化試験及び薬剤性末梢血好塩基球活性化試験が陰性であった 29 例に薬剤投与試験を実施したところ、28 例で無症状であった。陰性反応的中率は

96.6% であった。

6. DIHS の診断と治療法の検討

DIHS において、血清 TARC 値は皮疹の重症度、異型リンパ球割合、ヒトヘルペスウイルス 6 の DNA コピー数、血清 IL-10 値と相関がみられ、重症度マーカーとなる可能性が示された。

DIHS 2 例に対して、スクロスポリン 2 mg/kg/日、1 週間の投与を行なったところ、皮膚症状を含む臨床症状の速やかな改善を認めた。

愛媛大学病院を受診した DIHS20 例のうち、ステロイド投与が行われたのは 13 例であった。うち 6 例は発症 6 日までに、残り 7 例は発症後 7 日以降に投与開始されていた。ステロイドの発症早期の投与はヒトヘルペスウイルス 6 の再活性化を抑制するが、ステロイドの投与はサイトメガロウイルスの再活性化を増強することが示唆された。

7. 分子標的薬や生物学的製剤にみられる皮膚障害の実態調査

11 施設で上皮成長因子阻害薬やマルチキナーゼ阻害薬による皮膚障害を生じた 276 例を集積した。ざ瘡様皮疹 108 例、爪囲炎・肉芽腫 67 例、手足症候群 55 例、乾皮症 26 例、多形紅斑 19 例であった。薬剤の投与では、継続 188 例、減量 26 例、中止 100 例であった。

進行性悪性黒色腫に対してニボルマブを投与された症例の末梢血単核球をフローサイトメトリーにて解析した結果、抑制性 T 細胞の出現が皮疹の出現に関与することが示唆された。

D. 考察

本研究班の目的は、SJS/TEN 及びその類縁疾患に対して、エビデンスに基づいた診断基準・重症度分類、診療ガイドラインを作成するとともに適宜それらの改定を行い、関連学会での承認を経て、一般臨床医への普及を図り、医療水準の向上を目指すことである。このため本研究班では、2015 年度に SJS/TEN の診断基準を改定し、診療ガイ

ドライン 2016 を作成した。2016 年度は、日本皮膚科学会理事会で承認を得て、日本皮膚科学会誌第 9 号にこの診療ガイドラインの全文を掲載するとともに、SJS/TEN 診療ガイドライン 2016 のエッセンスを簡易版として作成し、会員へ配布した。これにより、本研究班の主要な目的は達成できていると考えている。今後は、SJS/TEN の個人調査票の集計を行い、的確な診断がなされているかを検証する必要がある。併せて、診療拠点病院を対象とした講習会を実施することにより、医療水準の向上を目指す必要がある。

また、SJS/TEN の発症予防は、最も求められる対策であり、このため SJS/TEN 発症の遺伝的要因の解明も併せて行ってきた。その結果、アロプリノールによる SJS/TEN では HLA-B*58:01 の保有率が有意に高く、また近傍に存在する TNF- α 遺伝子多型と連鎖して重症化に関与していることが示された。このことは、本邦においても、これまで報告があった漢民族と同様の遺伝的背景が発症に関与していることを示しており、あらかじめその保有の有無を検索することで発症を抑制し得る可能性を示した。一方、ラモトリギンによる SJS/TEN では関連する HLA は見出せず、薬物の濃度に関与する遺伝子群の関与が推察される。

本診療ガイドラインに記載された治療指針のエビデンスを集積するため、既存の治療法の有用性についても検討を行った。SJS/TEN に対しては第一選択としてステロイド療法が行われているが、そのエビデンスは必ずしも高くない。本年度は、SJS/TEN に対するステロイドパルス療法の有用性を検証する目的で、平成 20 年度に本研究班で集積した SJS/TEN 323 例の解析を行い、ステロイド大量療法群よりステロイドパルス療法群の死亡リスクが低いことを明らかにした。また、京都府立医大を受診した眼病変を有する SJS/TEN 7 症例の治療法を解析し、眼症状の後遺症予防に発症初期のステロイドパルス療法が有効であることも示す

ことができた。このことは、SJS/TEN の急速進行例に対してはステロイドパルス療法が推奨される、とする診療ガイドライン 2016 を指示する結果であった。今後、SJS/TEN 急速進行例に対するステロイドパルス療法の有用性を確認する前向き臨床試験を多国間臨床研究として実施することを計画している。さらに横浜市立大学病院を受診した SJS/TEN 100 例の解析を行い、死亡率が経年的に低下していることが示され、SJS/TEN におけるステロイド療法とそれ以外の複数の治療法の組み合わせの有用性が示唆された。このことも診療ガイドライン 2016 の治療指針を支持する結果と思われる。

一方、重症多型滲出性紅斑関連疾患である DIHS は、過去に本研究班で診断基準を策定したものの、重症度分類、診療ガイドラインは作成されていないため、今後の検討課題となっている。本研究では、診断における血清 TARC 値測定の意義、ステロイド治療が内在性ウイルス再活性化に与える影響、シクロスポリン療法の有用性の検討を行い、DIHS の診断において血清 TARC 値測定が極めて有用であること、DIHS への早期のステロイド治療はヒトヘルペスウイルス 6 の再活性化を抑制するが、ステロイド治療はサイトメガロウイルスの再活性化を増強すること、DIHS への短期シクロスポリン療法は有効であることを示唆する知見が得られた。今後、DIHS の診療ガイドラインの作成において有用なエビデンスになるものと思われる。

E. 結論

本研究では、日本皮膚科学会承認を得て、日本皮膚科学会誌第 9 号に本 SJS/TEN 診療ガイドラインの全文を掲載するとともに、SJS/TEN 診療ガイドライン 2016 のエッセンスを簡易版として作成し、会員へ配布した。併せて診療ガイドラインの記載事項に対するエビデンスを集積した。

F. 研究発表

1. 論文発表

研究成果の刊行に関する一覧表参照

2. 著書

研究成果の刊行に関する一覧表参照

3. 学会発表

森田栄伸

【2014年度】

1. 新原寛之, 河野邦江, 金子 栄, 森田栄伸: カルバマゼピンによる薬疹関連特異HLAのLAMP法によるスクリーニング法. 第26回日本アレルギー学会春季臨床大会, 京都, 平成26年5月9-11日
2. 千貫祐子, 伊藤和行, 高橋 仁, 森田栄伸: セツキシマブによるアナフィラキシーと α -gal. 第26回日本アレルギー学会春季臨床大会 シンポジウム 6. 京都市, 2014年5月
3. 千貫祐子, 伊藤和行, 高橋 仁, 森田栄伸: セツキシマブによるアナフィラキシーの予知予防. 第113回日本皮膚科学会総会 教育講演. 京都市, 2014年6月
4. 千貫祐子: マダニ咬傷から始まる牛肉・セツキシマブアレルギー. 第44回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会 シンポジウム 5. 仙台市, 2014年11月
5. Morita E, Chinuki Y, Takahashi H, Takeda M, Takeuchi K, Ito K: Galactose- α -1,3-galactose(α -gal)-specific IgE test is highly useful for predicting Cetuximab-induced Anaphylaxis. 6th Drug Hypersensitivity Meeting. Switzerland, April 9-12, 2014
6. 千貫祐子, 井上政弥, 川上耕史, 熊野御堂慧, 森山一郎, 鈴宮淳司, 森田栄伸: セツキシマブによるアナフィラキシーショックの1例. 第137回日本皮膚科学会宮崎地方会 瀬戸山充教授退任記念. 宮崎市, 2014年3月

7. 千貫祐子, 伊藤和行, 武田真紀子, 竹内 薫, 小田直治, 高橋 仁, 森田栄伸: 頭頸部癌患者 64名における α -Gal関連抗原特異的 IgE 保有率とセツキシマブによるアナフィラキシー回避の試み. 第66回日本皮膚科学会西部支部学術大会. 高松市, 2014年11月

8. 野上京子, 千貫祐子, 澄川靖之, 今岡かおる, 森田栄伸, 福代新治, 高橋賢史: 塩酸エペリゾンによるアナフィラキシー型薬疹の2例. 第66回日本皮膚科学会西部支部学術大会. 高松市, 2014年11月

9. 飛田礼子, 千貫祐子, 野上京子, 森田栄伸: カルボシステインの固定薬疹の診断におけるチオジグリコール酸を用いた貼付試験の検討. 第66回日本皮膚科学会西部支部学術大会. 高松市, 2014年11月

【2015年度】

1. 千貫祐子, 井上政弥, 川上耕史, 熊野御堂 慧, 鈴宮淳司, 森田栄伸 セツキシマブによるアナフィラキシーショックの1例. 第137回日本皮膚科学会宮崎地方会, 宮崎, 2014年3月8日.
2. 千貫祐子, 伊藤和行, 武田真紀子, 竹内 薫, 小田直治, 高橋 仁, 森田栄伸. 頭頸部癌患者 64名における α -gal 関連抗原特異的 IgE 保有率とセツキシマブによるアナフィラキシー回避の試み. 第64回日本アレルギー学会春季臨床大会, 東京, 2015年5月26日.
3. 野上京子, 千貫祐子, 澄川靖之, 今岡かおる, 森田栄伸, 福代新治, 高橋賢史. 塩酸エペリゾンによるアナフィラキシー型薬疹の2例. 第67回日本皮膚科学会西部支部学術大会, 長崎, 2015年10月17日.
4. 中川優生, 新原寛之, 金子 栄, 飛田礼子, 森田栄伸. 発症早期のステロイドミニパルス投与で改善した重症薬疹の3例. 第45回日本皮膚アレルギー・接

触皮膚炎学会総会学術大会, 出雲, 2015年11月20日.

5. 杉原靖子, 新原寛之, 中川優生, 白築理恵, 飛田礼子, 森田栄伸. Loop-Mediated Isothermal Amplification (LAMP) にて HLA-A*3101 を検出したカルバマゼピンによる DIHS の2例. 第45回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会, 出雲, 2015年11月20日.
6. 小松貴義, 太田征孝, 千貫祐子, 新原寛之, 森田栄伸. 血清 TARC 値迅速測定が有用であった薬剤性過敏症症候群 (DIHS) の1例. 第45回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会, 出雲, 2015年11月20日.

【2016年度】

1. 森田栄伸. 重症薬疹の評価と治療. シンポジウム 18 医薬品による皮膚障害の科学的評価 第37回日本臨床薬理学会 2016年12月2日 米子市

佐山浩二

【2014年度】

1. Tohyama M, Dai X, Shiraishi K, Murakami M, Sayama K: Endoplasmic reticulum stress-induced keratinocyte necrosis is a new mechanism of epidermal cell death in SJS/TEN. The 39th Annual Meeting of the Japanese Society for Investigative Dermatology, Osaka, Dec 12-14, 2014.
2. Oda F, Tohyama M, Sayama K: Bromoderma caused by sedative intoxication mimicking pyoderma gangrenosum. Drug Hypersensitivity Meeting, Bern, April 9-12, 2014.
3. 渡部沙織, 宮脇さおり, 藤山幹子, 佐山浩二, 松本聖武, 織田英昭: ニコランジルによる難治性口腔潰瘍の1例. 第59回日本皮膚科学会愛媛地方会学術大会, 松山, 平成26年3月9日.
4. 増田香奈, 藤山幹子, 佐山浩二, 飯尾智

恵: 経口プレドニゾロンにより増悪した慢性蕁麻疹の1例. 第60回日本皮膚科学会愛媛地方会学術大会, 松山, 平成26年11月1日.

5. 難波千佳, 藤山幹子, 佐山浩二 (愛媛大), 藤田博己: セツキシマブによるアナフィラキシーとマダニ咬傷との関連. 第44回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会, 仙台, 平成26年11月21-23日.

相原道子

【2014年度】

1. Saito Y, Kaniwa N, Ueta M, Nakamura R, Sugiyama E, Maekawa K, Takahashi Y, Furuya H, Yagami A, Matsukura S, Ikezawa Z, Matsunaga K, Sotozono C, Aihara M, Kinoshita S : Medication tendencies for inducing severe ocular surface symptoms in Japanese Stevens-Johnson syndrome / toxic epidermal necrolysis patients. The 6th Drug Hypersensitivity Meeting, Bern, April 2014.
2. Nakamura R, Kaniwa N, Ueta M, Sotozono C, Sugiyama E, Maekawa K, Yagami A, Matsukura S, Ikezawa Z, Matsunaga K, Tokunaga K, Aihara M, Kinoshita S, Saito Y: HLA association with antipyretic analgesics-induced Stevens-Johnson syndrome / toxic epidermal necrolysis with severe ocular surface complications in Japanese patients. The 6th Drug Hypersensitivity Meeting, Bern, April 2014.
3. 相原道子: ランチョンセミナー SJS/TENの最新治療~IVIg療法を中心に~. 第36回水疱症研究会, 東京, 平成26年10月19日.
4. 相原道子: ランチョンセミナー 薬疹の最近の動向. 日本皮膚科学会福島地方会第368回例会, 郡山, 平成26年11月3日.

5. 相原道子: イブニングセミナー1 重症薬疹の最近の治療-併用療法としてのIVIG療法について. 第44回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会, 仙台, 平成26年11月21日.
6. 相原道子: Stevens-Johnson 症候群と中毒性表皮壊死症(講義). 第1回総合アレルギー講習会, 横浜, 平成26年12月21日.
7. 山根裕美子, 大川智子, 金岡美和, 守田亜希子, 中村和子, 松倉節子, 蒲原毅, 相原道子: Stevens-Johnson syndrome (SJS) および Toxic epidermal necrolysis(TEN)の治療と予後に関する検討. 第44回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会, 仙台, 平成26年11月22日.
8. 菊地彩音, 石田修一, 宮川まみ, 渡邊友也, 大川智子, 相原道子: 再燃を繰り返した不全型DIHSの1症例. 日本皮膚科学会第856回東京地方会, 横浜, 平成26年9月20日.
9. 菊地彩音, 石田修一, 大川智子, 堀内義仁, 相原道子: TENに免疫グロブリン大量静注療法が奏功した1例. 第44回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会, 仙台, 平成26年11月22日.
10. 岡崎法子, 山元麻生, 宇津宮まりか, 佐藤麻起, 河野真純, 中村和子, 相原道子, 蒲原毅: トニックウォーター摂取後に生じた多発性固定疹の1例. 日本皮膚科学会第853回東京地方会, 横浜, 平成26年11月15日.
【2015年度】
1. Aihara M : Intravenous Immunoglobulin (IVIG) clinical trial for Stevens-Johnson syndrome and toxic epidermal necrolysis in Japan. The 9th International Congress on Cutaneous Adverse Drug Reaction, Vancouver, 2015,6,8.
2. Aihara M, Kambara T, Katayama I, Miyachi Y, Asada H, Morita E, Ochiai T, Kano Y, Watanabe H, Nagao K, Hashimoto K, Shiohara T : Open-label, Multicenter, Single-arm Study of Intravenous Immunoglobulin Therapy for Stevens-Johnson Syndrome and Toxic Epidermal Necrolysis. 23rd World Congress of Dermatology, Vancouver, 2015,6,9-13.
3. 相原道子 : 教育講演25 重症薬疹What's new? SJS/TENのIVIG療法. 第114回日本皮膚科学会総会, 横浜, 2015,5,30.
4. 前川京子, 鹿庭なほ子, 関根グループ, 宇梶真帆, 松澤由美子, 中村亮介, 杉山永見子, 内田好海, 黒瀬光一, 上田真由美, 外園千恵, 池田浩子, 矢上晶子, 松倉節子, 木下 茂, 村松正明, 古谷博和, 高橋幸利, 松永佳世子, 相原道子, 関根章博, 日本データサイエンスコンソーシアム, 斎藤嘉朗: 日本人におけるカルバマゼピン誘因性薬疹発症の危険因子HLA-A*31:01のサロゲートマーカー多型を対象としたタイピング系の構築. 日本薬理学会135回年会, 神戸, 2015,3.
5. 中村亮介, 鹿庭なほ子, 上田真由美, 岡本好海, 杉山永見子, 前川京子, 高橋幸利, 古谷博和, 矢上晶子, 松倉節子, 池澤善郎, 松永佳世子, 徳永勝士, 外園千恵, 相原道子, 木下 茂, 斎藤嘉朗: 重症眼粘膜障害を伴うSJS/TENの発症と関連する被疑薬およびHLA型について. 第64回日本アレルギー学会学術大会, 東京, 2015,5,26.
6. 佐井君江, 中村亮介, 今任拓也, 岡本好海, 梶波康二, 松永佳世子, 相原道子, 斎藤嘉朗: 重篤副作用発症における感染症併発の影響ー横紋筋融解症及び重症薬疹の事例ー. 第42回日本毒性学会学術年会, 金沢, 2015,6,30.
7. 佐井君江, 中村亮介, 今任拓也, 岡本好海, 梶波康二, 松永佳世子, 相原道子, 斎藤嘉朗: 重篤副作用の発症・重篤性と感染症併発との関連ー横紋筋融解症及び重症薬疹との比較ー. 第36回日本臨床薬理学会学術大会総会, 東京, 2015,

- 12.
8. 松倉節子, 鈴木麻生, 佐野 遥, 宮沢めぐみ, 相原道子: アムロジピンベシル酸による薬疹の4例. 第45回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会, 出雲, 2015,11,20.
 9. 渡邊友也, 山口由衣, 猪又直子, 相原道子: 当科で経験したアダリムマブ投与後に生じた掌蹠膿疱症様皮疹4例のまとめ. 第30回日本乾癬学会学術大会, 名古屋, 2015,9,5.
 10. 渡邊友也, 山口由衣, 佐藤 愛, 井上雄介, 大川智子, 猪又直子, 和田秀文, 相原道子: 当科で経験した分子標的薬による皮膚障害147例のまとめ. 第45回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会, 出雲, 2015,11,21.
 11. 渡邊友也, 小田香世子, 和田秀文, 梶本光要, 種子島智彦, 稲川紀章, 相原道子: Nivolumab投与患者における皮膚障害. 第45回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会, 出雲, 2015,11,21.
 12. 種子島智彦, 和田秀文, 梶本光要, 稲川紀彰, 小田香世子, 相原道子: 当院におけるニボルマブ投与10症例の報告～副作用を中心に～. 第31回日本皮膚悪性腫瘍学会学術大会, 大阪, 2015, 7, 3.
 13. 宇津宮まりか, 山元麻生, 佐藤麻起, 河野真純, 中村和子, 相原道子: DIHSとの鑑別を要したサラゾスルファピリジンによるStevens-Johnson症候群の1例. 第64回日本アレルギー学会学術大会, 東京, 2015,5,26.
 14. 佐野 遥, 松倉節子, 長田 淳, 相原道子: 抗生剤が被疑薬と考えられた急性汎発性発疹性膿疱症の1例. 日本皮膚科学会第864回東京地方会, 横浜, 2015,12,19.
 15. 鹿毛勇太, 磯田祐士, 大川智子, 相原道子, 高橋秀聡, 荒井康裕: 80%の表皮剥離を生じたが集中治療により救命しえた中毒性表皮壊死症の1例. 日本皮膚科学会第863回東京地方会, 伊勢原, 2015,11,14.
 16. 前島沙織, 中村和子, 乙竹 泰, 佐藤麻起, 岡村友紀, 森下恵理, 河野真純, 蒲原 毅, 相原道子: 集学的治療が奏功した中毒性表皮壊死症の1例. 日本皮膚科学会第864回東京地方会, 横浜, 2015,12,19.
- 【2016年度】
1. 中村和子, 相原道子: 教育プログラム1「皮膚アレルギー・過敏症検査入門」薬物アレルギー. 第80回日本皮膚科学会東京支部学術大会, 横浜, 2017,2,11.
 2. 渡辺裕子, 山口由衣, 相原道子: シンポジウム8「薬剤による皮膚障害」分子標的自己免疫疾患治療薬による皮膚障害. 第80回日本皮膚科学会東京支部学術大会, 横浜, 2017,2,12.
 3. 高村直子, 山根裕美子, 松倉節子, 中村和子, 渡辺裕子, 山口由衣, 蒲原 毅, 池澤善郎, 相原道子: 当科におけるStevens-Johnson症候群(SJS), 中毒性表皮壊死症(TEN)の治療・予後の臨床解析. 第80回日本皮膚科学会東京支部学術大会, 横浜, 2017,2,11.
 4. Nakamura R, Sai K, Imatoh T, Okamoto-Uchida Y, Kajinami K, Matsunaga K, Aihara M, Saito Y: Effects of infection on incidence/severity of SJS/TEN and myopathy in Japanese cases analyzed by voluntary case reports. DHM 2016, Malaga, Spain. 21-23, April, 2016.
 5. Yamaguchi Y, Watanabe T, Satoh M, Tanegashima T, Oda K, Wada H, Aihara M: Cutaneous adverse reactions of molecular targeted agents -a retrospective analysis in 150 patients in our department-. DHM 2016, Malaga, Spain, 2016, 4,22.
 6. Takamura N, Yamane Y, Matsukura S, Nakamura K, Watanabe Y, Yamaguchi Y, Kambara T, Ikezawa Z, Aihara M: Retrospective analysis of Stevens-Johnson syndrome and toxic epidermal necrolysis in

- Japanese patients - treatment and outcome. DHM 2016, Malaga, Spain, 2016, 4,21.
7. 相原道子：シンポジウム4 非臨床・臨床クロストークによる医薬品安全性の科学的評価-皮膚障害におけるメカニズムを題材として- 重症薬疹の病態と発症メカニズム. 第6回レギュラトリーサイエンス学会学術大会, 東京, 2016,9,10.
 8. 中村和子, 相原道子：教育講演47 高齢者皮膚疾患診療 高齢者の薬疹・中毒疹. 第115回日本皮膚科学会総会, 京都, 2016,6,5.
 9. 桐野実緒, 中村和子, 乙竹 泰, 森下恵理, 佐藤麻起, 河野真純, 伏見謙一, 磯田晋, 相原道子, 蒲原 毅：免疫グロブリン大量静注療法が有効であった中毒性表皮壊死症. 第65回日本アレルギー学会学術大会, 東京, 2016,6,17.
 10. 山口由衣, 相原道子：教育講演31 重症薬疹の診断と対処法 SJS/TENの治療指針と対処法. 第115回日本皮膚科学会総会, 京都, 2016,6,4.
 11. 大川智子, 渡辺友也, 小田香世子, 和田秀文, 梶本光要, 種子島智彦, 磯田祐士, 相原道子：ヒト型抗ヒトPD-1抗体ニボルマブによる皮膚障害の検討. 第115回日本皮膚科学会総会, 京都, 2016,6,4.
 12. 種子島智彦, 和田秀文, 相原道子：当院における抗EGFR抗体製剤による皮膚障害への予防的介入についての検討. 第79回日本皮膚科学会東京・東部支部合同学術大会, 東京, 2016,2,20.
 13. 佐藤 愛, 渡辺友也, 山口由衣, 相原道子：当院における生物学的製剤による皮膚障害(2005年～2015年). 第79回日本皮膚科学会東京・東部支部合同学術大会, 東京, 2016,2,20.
 14. 乙竹 泰, 佐藤麻起, 森下恵理, 河野真純, 中村和子, 相原道子, 蒲原 毅：横紋筋融解症を伴った典型的DIHSの1例. 第115回日本皮膚科学会総会, 京都, 2016,6,4.
 15. 遠藤 恵, 種子島智彦, 大川智子, 井上雄介, 相原道子：壊疽性膿皮症を伴ったDDSによる薬剤性過敏症候群(DIHS)の1例. 日本皮膚科学会第865回東京地方会, 横浜, 2016,1,16.
 16. 鹿毛勇太, 磯田裕士, 大川智子, 金岡美和, 渡辺裕子, 相原道子：集学的治療により救命しえた中毒性表皮壊死症(TEN:toxic epidermal necrolysis)の2例. 第46回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会, 東京, 2016,11,5.
 17. 中尾恵美, 渡辺友也, 岩田潤一, 梶本光要, 田中理子, 梅本淳一, 高村直子, 竹林英理子, 長田 侑, 相原道子：成人Still病の治療中に発症し, 集学的治療で救命しえた中毒性表皮壊死症の1例. 日本皮膚科学会第866回東京地方会, 横浜, 2016,6,18.
- 末木博彦
【2014年度】
1. Sueki H: Characteristics of cutaneous adverse reaction in telaprevir-based triple therapy -the post marketing surveillance in Japan- 4th Taiwan-Telaprevir advisory board (T-TAB) meeting, in Taipei, July 5 2014.
 2. Watanabe H, Sueki H, et al. Association between HLA-B*13:01 and DIHS/DRESS due to dapson in a Japanese patients of pityriasis lichenoides et varioliformis acuta (PLEVA) DHM6, Bern, Switzerland, April 2014.
 3. 渡辺秀晃, 末木博彦, 他: 略全身の皮膚剥離がみられ救急医学科の協力のもとに全身処置を行い軽快したアセトアミノフェンによる中毒性表皮壊死症. 第44回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会. 仙台, 平成26年11月21-23日.
 4. 北島真理子, 渡辺秀晃, 末木博彦, 他: バクタによる lymphomatoid drug eruptionの1例. 第44回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会. 仙台, 平成26年11月21-23日.

5. 末木博彦, 渡辺秀晃. 薬疹の最新動向と今後の展望. (基調講演) 第78回日本皮膚科学会東京支部学術大会. 東京, 平成27年2月14-15日.
6. 海野早織, 渡辺秀晃, 末木博彦, 他: ドセタキセルにより強皮症様皮膚硬化を生じた1例. 第78回日本皮膚科学会東京支部学術大会. 東京, 平成27年2月14-15日.
7. 山本蘭, 渡辺秀晃, 末木博彦, 他 シアナマイドによる紅皮症型薬疹の1例. 第854回日本皮膚科学会東京地方会. 東京, 平成26年6月.
8. 笠ゆりな, 岩井信策, 渡辺秀晃, 末木博彦: ボルテゾミブによる薬疹の1例. 第856回日本皮膚科学会東京地方会. 東京, 平成26年9月.
9. 笠ゆりな, 今泉牧子, 北見由季, 渡辺秀晃, 末木博彦, 他: 誘発に1日量2日間の投与を要したムコダインによる固定薬疹の1例. 第858回日本皮膚科学会東京地方. 東京, 平成26年12月.
10. 末木博彦: 2型糖尿病患者に対するSGLT2阻害薬投与時のリスク管理—皮膚科医の立場から— 第49回糖尿病学の進歩. 岡山, 平成27年2月20日.
【2015年度】
1. 末木博彦: パネルディスカッション「薬疹」 SJS/TENの診断基準改訂. 第45回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会. 出雲市, 2015.12.11.
2. 鈴木茉莉恵, 猿田祐輔, 今泉牧子, 渡辺秀晃, 末木博彦: 薬剤性過敏症症候群(DIHS)の病態と皮膚粘膜眼症候群(SJS)のoverlapがみられ, フェニトインによると考えられた薬疹の1例. 第45回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会. 出雲市, 2015.11.22.
3. 渡辺秀晃: 薬剤アレルギー Stevens-Johnson 症候群と中毒性表皮壊死症 日本アレルギー学会第2回総合アレルギー講習会. 横浜市, 2015. 12.12.
【2016年度】
1. 武重 千沙, 佐々木 駿, 藤山 幹子, 渡辺 秀晃, 末木 博彦: ラモトリギン内服開始11ヵ月後に発症した薬剤性過敏症症候群(DIHS)の1例. *Journal of Environmental Dermatology and Cutaneous Allergy* 10: 407, 2016
2. 小林 香映, 渡辺 秀晃, 安藤 はるか, 田代 康哉, 北見 由季, 中村 華子, 足立 真, 國谷 嵩, 安部 博昭, 末木 博彦: 化膿性脊椎炎の手術後にタケキャブにより発症したと考えられた中毒性表皮壊死症(TEN)の1例. *Journal of Environmental Dermatology and Cutaneous Allergy* 10:406, 2016.
3. 末木博彦: SJS/TENの診断 (診断基準改訂を含めて) 第115回日本皮膚科学会総会. 京都市 2016. 6.3.
4. 渡辺 秀晃, 末木 博彦, 合田 浩明, 日下部 吉男: 薬剤性過敏症症候群(DIHS)の原因薬ジアフェニルスルフォン(DDS)とHLAの結合様式についての検討. 第115回日本皮膚科学会総会. 京都市 2016. 6.3.
5. Sueki H: Regional epidemiology & pharmacogenomics, networks, progress, challenge & opportunities. SJS/TEN 2017: Building multidisciplinary networks to drive science & translation, Orlando, FL, USA, 2017.3.2.

浅田秀夫

【2014年度】

1. Miyashita K, Shoubatake C, Miyagawa F, Kobayashi N, Onmori R, Asada H: Involvement of HHV-6 infection in renal dysfunction associated with DIHS. The 39th Annual Meeting of the Japanese Society for Investigative Dermatology, Osaka, Dec 12-14, 2014.
2. Ommori R, Park K, Imoto K, Asada H: Epidermal growth factor receptor inhibitors selectively inhibit the expression of human β -defensins induced by Staphylococci. The

39th Annual Meeting of the Japanese Society for Investigative Dermatology, Osaka, Dec 12-14, 2014.

3. 浅田秀夫: ウイルスと薬疹の接点. 第1回総合アレルギー講習会, 横浜, 平成26年12月20-21日.
 4. 西村知珠, 飯田秀之, 小川浩平, 小林信彦, 浅田秀夫: ヒト免疫グロブリン大量静注療法が奏功したStevens-Johnson症候群の1例, 日本皮膚科学会大阪地方会, 大阪, 平成26年12月6日.
 5. 光井康博, 大黒奈津子, 御守里絵, 小川浩平, 小林信彦, 浅田秀夫: HHV-6の持続感染の関与が疑われた紅皮症の1例. 第44回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会, 仙台, 平成26年11月21-23日.
 6. 小川浩平, 浅田秀夫: 重症薬疹診断のバイオマーカー. 第113回日本皮膚科学回総会, 京都, 平成26年5月30-6月1日.
 7. 宮下和也, 正嶋千夏, 小川浩平, 飯岡弘至, 米川真輔, 田邊香, 川手健次, 岡崎愛子, 小林信彦, 浅田秀夫: 急性腎障害を伴い透析導入を要した薬剤性過敏症候群(DIHS)の1例. 第113回日本皮膚科学回総会, 京都, 平成26年5月30日-6月1日.
- 【2015年度】
10. Miyagawa F, Nakamura Y, Asada H: Preferential expression of CD134, HHV-6 cellular receptor, on CD4 T cells in drug-induced hypersensitivity syndrome. The 40th Annual Meeting of the Japanese Society for Investigative Dermatology, Okayama, Dec 11-13, 2015.
 11. 浅田秀夫: 薬疹のトピックスーウイルス感染との関わりを中心に (特別講演). 第65回日本皮膚科学会高知地方会, 高知, 平成27年2月7日.
 12. 浅田秀夫: 薬疹のバイオマーカー (パネルディスカッション5). 第45回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会

学術大会, 松江, 平成27年11月20-22日.

13. 西村知珠, 飯田秀之, 小川浩平, 小林信彦, 浅田秀夫: ヒト免疫グロブリン大量静注療法が奏功したStevens-Johnson症候群の一例, 第45回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会, 松江, 平成27年11月20-22日.
- 宮川 史, 中村友紀, 浅田秀夫: 薬剤性過敏症候群患者の末梢血単核球におけるHHV-6受容体の解析. 第45回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会, 松江, 平成27年11月20-22日.
- 【2016年度】
1. Miyashita K, Miyagawa F, Nakamura Y, Onmori R, Azukizawa H, Asada H: Up-regulation of HHV-6 microRNAs in the serum of DIHS/DRESS patients. The 41th Annual Meeting of the Japanese Society for Investigative Dermatology, Sendai, Dec 9-11, 2016.
 2. Nakamura Y, Miyashita K, Onmori R, Miyagawa F, Azukizawa H, Asada H: The characteristics of patients with persistent HHV-6 infection after drug-induced hypersensitivity syndrome (DIHS). The 41th Annual Meeting of the Japanese Society for Investigative Dermatology, Sendai, Dec 9-11, 2016.
 3. 宮川史, 浅田秀夫: DIHS の診断 (ウイルス再活性化, TARC を含めて), 第115回日本皮膚科学会総会, 京都, 平成28年6月3日~6月5日
 4. 正嶋千夏, 小豆澤宏明, 浅田秀夫: 過酸化ベンゾイル外用にて改善したセツキシマブによる蕁麻疹の2例, 第46回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会, 東京, 平成28年11月5日~11月6日
 5. 中村友紀, 宮下和也, 宮川史, 小豆澤宏明, 浅田秀夫: DIHS における血清TARC 値と臨床症状および検査所見との相関, 第46回日本皮膚アレルギー・

接触皮膚炎学会総会学術大会, 東京, 平成28年11月5日~11月6日

6. 加藤 健一, 小豆澤 宏明, 花房 崇明, 中川 幸延, 片山 一郎: 薬剤遅延型アレルギーにおける *in vitro* での原因薬剤の特定方法の検討, 東京, 平成28年11月5日~11月6日
7. 加藤 健一, 小豆澤 宏明, 花房 崇明, 片山 一郎: 薬剤遅延型アレルギーにおける *in vitro* での原因薬剤の特定方法の検討, 第115回日本皮膚科学会総会, 京都, 平成28年6月3日~6月5日

椛島健治

【2015年度】

1. Yujin Nakagawa, Kenji Kabashima: Lymph node stromal cell-mediated deletional tolerance controls the development of GVHD-like skin lesion in Involucrin-mOVA mice. The 40th Annual Meeting of the Japanese Society for Investigative Dermatology, Okayama, Dec 11-13, 2015.

【2016年度】

1. 野村尚史, 要石就斗, 菊地綾子, 加来洋, 遠藤雄一郎, 大日輝記, 椛島健治: 下口唇粘膜障害で発症したTS-1によるStevens-Johnson症候群の一例. 第46回日本皮膚アレルギー接触皮膚炎学会, 新宿/東京, 平成28年11月5日.
2. Sakurai K, Dainichi T, Matsumoto R, Nakano Y, Kabashima K: Establishment of a novel murine model of psoriasis by activating p38 MAPK pathway. The 41st Annual Meeting of the Japanese Society for Investigative Dermatology. Sendai/Miyagi, December 9-11, 2016.

橋爪秀夫

【2014年度】

1. Hashizume H; Monomyeloid precursors in drug-induced hypersensitivity syndrome (DIHS). 6th Drug Hypersensitivity Meeting,

Switzerland 9-10 April, 2014.

2. 橋爪秀夫; 静岡県皮膚科医会企画 お茶畑からみた即時型アレルギー. 第30回日本臨床皮膚科学会, 横浜, 平成26年4月26日.
3. 橋爪秀夫; 薬疹情報の将来. 第44回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会, 仙台, 平成26年11月22日.
4. 橋爪秀夫: 薬疹とHLA. 第78回日本皮膚科学会東京支部学術大会 東京, 平成27年2月21日.
5. 影山玲子, 馬屋原孝恒, 橋爪秀夫, 橋充弘: 当科で経験したStevens-Johnson症候群と重症多形滲出性紅斑の各一例. 第15回浜名湖皮膚病理研究会, 浜松, 平成27年2月28日.

【2015年度】

1. Hashizume H. Possible mechanisms of HHV-6 reactivation in drug-induced hypersensitivity/drug rash with eosinophilia and systemic symptoms. 9th International Conference on HHV-6 & 7. Boston, U.S.A., Nov 8-11, 2015.
2. 橋爪秀夫. 薬疹データベースの進捗状況. 第45回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会. 松江市, 11月20-22日, 2015年.
3. 橋爪秀夫. DIHSにおけるHHV-6の再活性化のメカニズム. 第114回日本皮膚科学会総会. 横浜市, 5月29-31日, 2015年.
4. 橋爪秀夫. 薬疹とHLA. 第78回日本皮膚科学会東京支部学術大会. 東京, 2月20-21日, 2015年.
5. 橋爪秀夫. マダニと好塩基球. 第78回日本皮膚科学会東京支部学術大会. 東京, 2月20-21日, 2015年.

【2016年度】

1. Fujiyama H, Hashizume H, Yoshiki T. Ex-vivo expanded skin-Infiltrating T cells from severe drug eruptions are reactive with causative drugs: A possible novel method for determination of causative drugs. Drug Hypersensitivity Meeting

2016 Maraga, Spain 4月20日-26日

2. 橋爪秀夫 「爪白癬の治療と問題点」
三重爪白癬研究会 津市 10月6日
3. 橋爪秀夫 「最近の薬疹」中部医学会
学術大会 静岡市医師会館 10月15日
4. 橋爪秀夫 「なぜ起こるか-最新の薬疹」
日本皮膚科学会教育講習会 アクトシ
ティ浜松 浜松市 10月29日
5. 橋爪秀夫 薬疹情報データベース構築
の進捗状況 共同研究シンポジウム
日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会
京王プラザホテル 東京 11月5日
6. 橋爪秀夫 薬剤性過敏症症候群の病態
と治療 日本アレルギー学会 第3回
総合アレルギー研修会 パシフィコ横
浜 横浜市 12月17日
7. 橋爪秀夫 最近の薬疹について 島田
市薬剤師会学術講演会 島田市医師会
館 島田市 1月20日

阿部理一郎

【2014年度】

1. Riichiro Abe. Novel pathway of
keratinocyte death in SJS/TEN. DHM6,
Bern, Switzerland, April, 2014.

【2015年度】

1. 阿部理一郎、SJS/TENにおける表皮壊死
のメカニズム、日本皮膚科学会総会、
平成27年5月29-31日、横浜
2. Riichiro Abe, Development of
anti-SJS/TEN drug targeting keratinocyte
death mechanism, The 11st Annual
Meeting of Taiwanese Society for
Investigative Dermatology, Taipei, Nov
20-22. 2015.

【2016年度】

1. 阿部理一郎、SJS/TENの発症メカニズム、
日本皮膚科学会東京東部支部総会、平
成28年2月20日、東京
2. Riichiro Abe, Pathomechanism of severe
adverse drug reaction: Bench to Bedside,
中国皮膚科学会、平成28年5月26日、厦
門

高橋勇人

【2014年度】

1. Adachi T, Takahashi H, Funakoshi T, Hirai
H, Hashiguchi A, Amagai M, Nagao K:
Comparison of basophil activation test and
lymphocyte transformation test as
diagnostic assays for drug hypersensitivity.
The 6th Drug Hypersensitivity Meeting,
Bern, Switzerland, April 10th, 2014.
2. 八代聖, 本田皓, 足立剛也, 船越建, 高
橋勇人, 天谷雅行: ゾニサミド内服早
期に発症した薬剤性過敏症症候群の1
例. 第856回日本皮膚科学会東京地方会
城西地区, 東京, 平成26年9月20日.
3. 足立剛也, 高橋勇人, 橋口明彦, 平井博
之, 永尾圭介: 薬剤性過敏症症候群長
期フォローアップにおける免疫動態の
解析 -薬剤リンパ球刺激試験と末梢血
CD4/8比の有用性-. 第44回日本皮膚ア
レルギー・接触皮膚炎学会総会学術大
会, 仙台, 平成26年11月22日.

【2015年度】

1. 足立剛也, 高橋勇人, 船越建, 平井博之,
橋口明彦, 天谷雅行, 永尾圭介: 薬剤ア
レルギー評価における好塩基球活性化
試験と薬剤リンパ球刺激試験の有用性
の検討. 第114回日本皮膚科学会総会.
横浜 2015.5.29-31
2. 福田理紗, 平井郁子, 船越建, 種瀬啓
士, 谷川瑛子, 高橋勇人: 急性汎発性発
疹性膿疱症様の臨床像を同一部位に繰
り返した薬疹の1例. 第45回日本皮膚
アレルギー接触皮膚炎学会総会. 松江
2015.11.20-22

【2016年度】

1. Clinical features of dipeptidyl peptidase-IV
(DPP-4) inhibitors-associated bullous
pemphigoid experienced in our
department: Hiroto Horikawa, Yuichi
Kurihara, Jun Yamagami, Takeru
Funakoshi, Noriko Umegaki-Arao, Hayato
Takahashi, Akiharu Kubo, Wataru Nishie,
Kentaro Izumi, Masayuki Amagai. 12th
Meeting of the German-Japanese Society

of Dermatology. Nagano, 2016.10.12-14

2. 入來景悟、大内健嗣、澤田美穂、向井美穂、馬場裕子、足立剛也、舩越建、天谷雅行、高橋勇人: アクテムラ®投与中に薬剤性過敏症症候群に特徴的な所見を呈した薬疹の1例, 第46回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会 東京, 2016.11.5-6
3. 高橋勇人: 免疫学でできた薬疹理解. 平成28年度日本皮膚科学会東部支部企画研修講習会, 浜松, 2016.10.30.

青山裕美

【2015年度】

1. Yumi Aoyama: Management of recurrent manifestations and autoimmunity in DIHS/DRESS. ISCAR2015, The 23RD World Congress of Dermatology in 2015. 2015.06.06 Vancouver, Canada

黒沢美智子

【2014年度】

1. Kurosawa M, Kano Y, Shinohara T, Yokoyama K: Epidemiological and clinical characteristics of Stevens-Johnson Syndrome and toxic epidermal necrolysis in Japan: finding from a database of patients receiving financial aid for treatment. 20th IEA World Congress of Epidemiology, Alaska, 8/17-21, 2014.
 2. 黒沢美智子, 狩野葉子, 塩原哲夫, 福島若葉, 廣田良夫, 横山和仁: 全国疫学調査による薬剤性過敏症症候群 (DIHS) の患者数推計. 第85回日本衛生学会学術総会, 和歌山, 平成27年3月26-28日.
- 【2015年度】
1. 黒沢美智子, 狩野葉子, 塩原哲夫, 福島若葉, 廣田良夫, 横山和仁. 全国疫学調査による薬剤性過敏症症候群 (DIHS) の患者数推計. 第85回日本衛生学会学術総会, 和歌山, 平成27年3月26-28日.
 2. 黒沢美智子, 縣俊彦, 稲葉裕, 横山和仁: 増える難病と減る難病-将来予想. 第80

回日本民族衛生学会総会, 弘前, 11/13-14, 2015.

3. 縣俊彦, 西川浩昭, 黒沢美智子, 横山和仁, 稲葉裕: 難病の新法律施行に伴う社会的影響について. 第80回日本民族衛生学会総会, 弘前, 11/13-14, 2015.
4. 黒沢美智子, 中村好一, 横山和仁, 北村文彦, 武藤剛, 縣俊彦, 稲葉裕: 難病医療受給者の就労割合. 第26回日本疫学会総会, 米子, 平成28年1月21-23日

【2016年度】

1. 黒沢美智子, 狩野葉子, 塩原哲夫, 福島若葉, 廣田良夫, 中村好一, 横山和仁: 薬剤性過敏症症候群 (DIHS) 全国疫学調査終了後の追跡 (後遺症) 調査. 第86回日本衛生学会学術総会, 旭川, 平成28年5月11-13日
2. 黒沢美智子, 中村好一, 横山和仁, 北村文彦, 武藤剛, 縣俊彦, 稲葉裕: 就労年齢にある難病医療受給者の平成24年度男女別就労割合. 第75回日本公衆衛生学会総会, 大阪, 平成28年10月26-28日

薙田泰誠

【2014年度】

1. 薙田泰誠: ファーマコゲノミクスに基づく重症薬疹の発症リスクの予測. 第113回日本皮膚科学会総会, 京都, 平成26年5月30-6月1日.
2. Ozeki T, Mushiroda T, Takahashi A, Kubo M et al. Additional genetic risk factors for carbamazepine-induced cutaneous adverse drug reactions detected by conditional analysis using *HLA-A*31:01* as a covariant in Japanese population. The 64th Annual Meeting of the American Society of Human Genetics (ASHG), San Diego, October 18-22, 2014.
3. 大関健志, 薙田泰誠, 高橋篤, 久保充明: カルバマゼピン誘発薬疹の新規遺伝的マーカーの *HLA-A*31:01* を共変因子とした探索による同定と評価. 第59回日本人類遺伝学会 第21回日本遺伝

子診療学会 合同大会，東京，平成26年11月20－22日。

【2015年度】

1. 薙田泰誠：遺伝子検査による重篤な副作用の発現リスクの予測とその医学的有用性の検証。第32回日本TDM学会・学術大会，松本，平成27年5月23－24日。
2. 薙田泰誠：カルバマゼピン誘発薬疹を回避するための遺伝子検査の医学的有用性。第114回日本皮膚科学会総会，横浜，平成27年5月29－31日。
3. Ozeki T, Mushiroda T, Takahashi A, Kubo M: Genetic risk factors for β -lactam antibiotic-induced cutaneous adverse drug reactions in Japanese population. The 65th Annual Meeting of the American Society of Human Genetics (ASHG), Baltimore, October 6-10, 2015.
4. 薙田泰誠：HLA検査による医薬品の副作用発現リスクの予測。日本人類遺伝学会 第60回大会，東京，平成27年10月14－17日。
5. 大関健志，薙田泰誠，高橋篤，久保充明：日本人における β -ラクタム系抗菌薬誘発薬疹の遺伝的リスク因子の探索。日本人類遺伝学会第60回大会，東京，平成27年10月14－17日。
6. 薙田泰誠：ゲノム解析に基づく薬物応答性関連遺伝子の同定と薬物治療の個別適正化。第36回日本臨床薬理学会学術総会，東京，平成27年12月9－11日。
7. Ozeki T: Progress in association studies of HLA haplotypes as genomic determinants of drug-induced eruptions in Japan. The 1st International Stevens-Johnson Syndrome Symposium. JSPS Core-to-Core Program “International genome study based elucidation of pathology and assembly of treatment strategy of the severe ocular surface disease” , Kyoto, January 24, 2016.

【2016年度】

1. Ozeki T, Mushiroda T, Takahashi A, Kubo M: Genetic risk factors for phenobarbital

and phenytoin-induced cutaneous adverse drug reactions in Japanese population. The 13th International Congress of Human Genetics. (ICHG 2016), Kyoto, April 3-7, 2016.

2. 薙田泰誠：ゲノム情報に基づく薬物応答性関連遺伝子の同定と薬物治療の個別適正化。第2回日本医薬品安全性学会学術大会，岐阜，平成28年7月23-24日。
3. 薙田泰誠：薬疹関連ゲノムバイオマーカーの同定と臨床的有用性の検証。日本薬物動態学会年会 第31回年会，松本，平成28年10月13-15日。
4. Ozeki T, Mushiroda T, Takahashi A, Kubo M: Two amino acids in HLA-B explain majority of the associations between HLA and cutaneous adverse drug reactions induced by phenobarbital and phenytoin in Japanese population. The 66th Annual Meeting of the American Society of Human Genetics (ASHG), Vancouver, October 18-22, 2016.
5. Mushiroda T: Validation of clinical utility of HLA-A*31:01 test for avoidance of carbamazepine-induced skin rash. The 2nd International Stevens-Johnson Syndrome Symposium. JSPS Core-to-Core Program “International genome study based elucidation of pathology and assembly of treatment strategy of the severe ocular surface disease” , Kyoto, January 21-22, 2017.
6. Ozeki T: Genetic risk factors for beta-lactam antibiotic-induced cutaneous adverse drug reactions in Japanese population. The 2nd International Stevens-Johnson Syndrome Symposium. JSPS Core-to-Core Program “International genome study based elucidation of pathology and assembly of treatment strategy of the severe ocular surface disease” , Kyoto, January 21-22, 2017.

外園千恵

【2014年度】

1. 上田真由美, 外園千恵, 木下茂: アセトアミノフェン関連Stevens-Johnson症候群のHIA class I 解析. 第118回 日本眼科学会総会、東京、平成26年4月4日.
2. 外園千恵, 木下茂, 山内直樹, 大橋敏夫: 重症眼表面疾患に対する輪部支持型ハードコンタクトレンズ. 第120回京都眼科学会, 京都, 平成26年6月1日.
3. 外園千恵, 森川恵輔, 稲富勉, 中村隆宏, 横井則彦, 松尾俊康, 木下茂: 羊膜移植の現状. 第31回日本組織移植学会, 岐阜, 平成26年8月29日.
4. 上田真由美, 澤井裕美, 外園千恵, 徳永勝士, 木下茂: 感冒薬関連Stevens-Johnson症候群の全ゲノム関連解析. 第68回日本臨床眼科学会, 神戸, 平成26年11月13日.
5. 外園千恵, 山内直樹, 前田宗俊, 木下茂: 重症多形滲出性紅斑の眼後遺症に対する補助具としてのコンタクトレンズの開発. 第68回日本臨床眼科学会, 神戸, 平成26年11月13日.
6. 上田真由美, 外園千恵, 澤井裕美, 徳永勝士, 木下茂: 感冒薬に関して発症したStevens-Johnson症候群とPTGER3遺伝子との関連. 角膜カンファレンス2015 (第39回日本角膜学会総会, 第31回日本角膜移植学会), 高知, 平成27年2月11日.
7. 外園千恵, 松山琴音, 中谷英仁, 狩野葉子, 塩原哲夫, 上田真由美, 木下茂: Stevens-Johnson症候群および中毒性表皮壊死融解症の眼後遺症に関する予測因子. 角膜カンファレンス2015 (第39回日本角膜学会総会, 第31回日本角膜移植学会), 高知, 平成27年2月11日.
8. Sotozono C, Kano Y, Shiohara T, Sakabayashi S, Kinoshita S: Etiologic Features of Stevens-Johnson Syndrome (SJS) and Toxic Epidermal Necrolysis (TEN) with Ocular Involvement. WOC2014, APAO2014, Tokyo, Japan, 04.02-06, 2014.
9. Sotozono C: Invited Symposium, Contact Lens and Refractive Error, IMCLC Session: The Cornea in Contact Lens Wearers. "Limbal-supported Contact Lens for Sever Ocular Surface Diseases". WOC2014, APAO2014, Tokyo, Japan, 04.03, 2014.
10. Sotozono C. Symposium, Anterior Segment and Cataract, Management of Stevens-Johnson syndrome. AAPOS-JAPO-JASA Joint Meeting in Kyoto, Kyoto, Japan, 11.30, 2014.
11. Sotozono C: Tokyo Dental College. Symposium, Ocular Surface Reconstruction/ Stem Cell Therapy/ Keratoprosthesis "Cultivated Oral Muscosa Epithelial Transplantation". 2014 ACS, The 4th Biennial Scientific Meeting Asia Cornea Society, Taipei, Taiwan, 12.11, 2014.
12. 外園千恵: 皮膚科重症疾患と眼障害. さくら会, 大阪, 平成26年5月24日.
13. 外園千恵: 角膜上皮ステムセル疲弊症のリスクマネージメント. 第53回愛媛県眼科フォーラム, 愛媛, 平成26年6月22日.
14. 外園千恵, 特別講演 眼瞼周囲の疾患, 皮膚科と眼科の境界領域の疾患について. 三重皮膚科専門医会学術講演会, 三重, 平成26年10月16日.
15. 外園千恵: 特別講演 角膜上皮ステムセル疲弊症のリスクマネージメント. 第22回千葉眼科フォーラム, 千葉, 平成27年2月7日.

【2015年度】

1. 上田真由美, 外園千恵, 澤井裕美, 徳永勝士, 木下茂. 感冒薬に関して発症したStevens-Johnson症候群とPTGER3遺伝子との関連. 角膜カンファレンス2015 (第39回日本角膜学会総会, 第31回

- 日本角膜移植学会)、高知、2015.02.11.
2. 外園千恵、松山琴音、中谷英仁、狩野葉子、塩原哲夫、上田真由美、木下茂. Stevens-Johnson症候群および中毒性表皮壊死融解症の眼後遺症に関する予測因子. 角膜カンファランス2015 (第39回日本角膜学会総会、第31回日本角膜移植学会)、高知、2015.02.11.
 3. 外園千恵、松山琴音、中谷英仁、狩野葉子、塩原哲夫、上田真由美、木下茂. Stevens-Johnson症候群および中毒性表皮壊死融解症における急性期眼障害のリスク因子. 第119回日本眼科学会総会、札幌、2015.04.17.
 4. 外園千恵、上田真由美、今井浩二郎、角栄里子、萩野顕、小泉範子、吉村直久、木下茂. 重症多形滲出性紅斑の眼後遺症に対する新規医療器具の医師指導治験. 第121回京都眼科学会 (平成27年度)、京都、2015.06.14.
 5. 外園千恵、上田真由美、今井浩二郎、寺向井聡、羽室淳爾、角栄里子、萩野顕、小泉範子、吉村長久、木下茂. 重症多形滲出性紅斑の眼後遺症に対する新規医療器具の医師主導治験. 第64回日本臨床眼科学会、名古屋、2015.10.23.
 6. 上田真由美、徳永勝士、外園千恵、澤井裕美、木下茂. 感冒薬関連Stevens-Johnson症候群発症におけるEP3遺伝子多型とHLA-A*02:06の相互作用. 第64回日本臨床眼科学会、名古屋、2015.10.25.
- 【2016年度】
1. Sotozono C. The Diagnostic Guideline and Treatment of Stevens-Johnson Syndrome, 31th Congress of the Asia-Pacific Academy of Ophthalmology (APAO 2016), Taipei, Taiwan, 2016.3.25.
 2. Sotozono C, Inatomi T, Nakamura T, Ueta M, Kinoshita S. Strategies for Visual Improvement in chronic SJS/TEN. 10th KPro Study Group Meeting, Kyoto ,Japan. 2016.4.22.
 3. Sotozono C. Tear-Exchangeable Limbal Rigid Contact Lens for Severe Ocular Surface Disorders. The CLAO and Eye & Contact Lens Educational Summit, Seattle, USA, 2016.4.30.
- 塩原哲夫
【2014年度】
1. 牛込悠紀子, 高橋良, 塩原哲夫: 重症薬疹の発症におけるpatrolling monocyteの相反する役割. 第78回日本皮膚科学会東京支部学術大会, 東京, 平成27年2月21-22日.
 2. Takahashi R, Ushigome Y, Shiohara T: Monocytes are crucial for a shift away from a Treg to Th17 response in mycoplasma pneumoniae infection and SJS/TEN. The 39th Annual Meeting of the Japanese Society for Investigative Dermatology, Osaka, Dec 12-14, 2014.
 3. 佐藤洋平, 三友貴代, 狩野葉子, 塩原哲夫: プレドニゾロン内服自己中断後に憎悪したStevens-Johnson症候群 (SJS) の一例. 第44回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会, 仙台, 平成26年11月21-23日.
 4. 倉田麻衣子, 堀江千穂, 早川順, 狩野葉子, 塩原哲夫: 免疫グロブリン上昇に伴い汗疱を生じたテグレトールによる薬剤性過敏性症候群 (DIHS) の1例. 第44回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会, 仙台, 平成26年11月21-23日.
 5. Horie C: Disseminated neonatal herpes simplex virus- 1 infection successfully treated with intravenous immunoglobulin (IVIg) in addition to acyclovir. German-Japanese Society of Dermatology, Germany, June 11-14, 2014.
 6. Kurata M, Sato Y, Hirahara K, Kano Y, Shiohara T: Sequential herpesvirus reactivations similar to graft-versus-host disease (GVHD) in a patient with

- drug-induced hypersensitivity syndrome / drug reaction with eosinophilia and systemic symptoms (DIHS/DRESS). German-Japan-Society for Dermatology Post Congress Meeting, Munich, June 14-16, 2014.
7. Kano Y, Kurata M, Sato Y, Shiohara T: Mycoplasma pneumoniae infection for the development of Stevens-Johnson syndrome. German-Japan-Society for Dermatology Post Congress Meeting, Munich, June 14-16, 2014.
 8. 佐藤洋平, 堀江千穂, 平原和久, 水川良子, 狩野葉子: 人工透析患者に生じた多発性固定薬疹の1例. 第113回 日本皮膚科学回総会, 京都, 平成26年5月30-6月1日.
 9. 堀江千穂: 薬剤性過敏症症候群と移植片対宿主病の類似性はヘルペスウイルスの再活性化がもたらす? 第113回 日本皮膚科学回総会, 京都, 平成26年5月30-6月1日.
 10. 塩原哲夫: IRS(Immune Reconstitution Syndrome)としてのDIHS, GVHD, サルコイドーシス. 第113回 日本皮膚科学回総会, 京都, 平成26年5月30-6月1日. 【2015年度】
 1. 塩原哲夫: シンポジウム「重症薬疹発症メカニズムから治療まで」. 薬剤性過敏症症候群(DiHS)の発症機序と治療. 日本皮膚科学会東京・東部支部合同学術大会, 新宿, 平成28年2月20日.
 2. Takahashi R, Ushigome Y, Shiohara T: An unfavorable shift from Treg to Th17 development can be preventable by selective depletion of IL-6-producing proinflammatory monocytes. 40th Annual Meeting of the Japanese Society for Investigative Dermatology, Okayama, December 11-13, 2015.
 3. 塩原哲夫: 教育講演 薬疹 DiHSの病態と臨床. 第45回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会, 松江, 2015年11月20 - 22日.
 4. 倉田麻衣子, 狩野葉子, 塩原哲夫: 粘膜疹を伴い単純ヘルペスウイルス(HSV)の再活性化を認めたアロプリノールによる薬剤過敏症症候群(DIHS)の1例. 第45回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会, 松江, 2015年11月20-22日.
 5. Shiohara T: Workshop [Severe Adverse Drug Reactions] Drug-induced hypersensitivity syndrome. The 24th World Allergy Organization, Seoul, October 14, 2015.
 6. 塩原哲夫: 特別講義「抗てんかん薬による薬疹について」. 東京Epilepsyカンファレンス2015, 東京, 平成27年9月19日.
 7. Shiohara T: Meet the Expert. Cutaneous drug eruptions. International Summer Academy, Munich, July 31, 2015.
 8. Aihara M, Kambara T, Katayama I, Miyachi T, Asada H, Morita E, Ochiai T, Kano Y, Watanabe H, Nagao K, Hashimoto K, Shiohara T: Open-label, multicenter, single-arm study of intravenous immunoglobulin therapy for Stevens-Johnson syndrome and toxic epidermal necrolysis. The 23rd World Congress of Dermatology, Vancouver, June 8-13, 2015.
 9. Shiohara T: Common drug reactions-from morbilliform to FDE. The 23rd World Congress of Dermatology, Vancouver, June 8-13, 2015.
 10. Mizukawa Y, Shiohara T: Lichenoid spectrum - from GVHD to lichenoid drug eruptions. The 23rd World Congress of Dermatology, Vancouver, June 8-13, 2015.
 11. Shiohara T: Newly described drug eruptions. The 23rd World Congress of Dermatology, Vancouver, June 8-13, 2015.
 12. Shiohara T: Pathophysiology of fixed drug eruption. 23rd World Congress of Dermatology, Vancouver, June 8-13, 2015.
 13. Shiohara T: DRESS/DIHS-Pathogenesis

-What's new? and What's next?
International Severe Cutaneous Adverse
Reaction. 9th International Congress on
Cutaneous Adverse Drug Reactions
(iSCAR2015), Vancouver, June 8, 2015.

14. Kano Y, Ushigome Y, Sato Y, Horie C, Shiohara T: Short- and long-term complications and sequelae in drug-induced hypersensitivity syndrome/ drug reaction with eosinophilia and systemic symptoms. International Severe Cutaneous Adverse Drug Reaction. 9th International Congress on Cutaneous Adverse Drug Reactions (iSCAR2015), Vancouver, June 8, 2015.
15. 塩原哲夫:「変貌する難病診療の最前線」重症多形滲出性紅斑における現状と未来. 第114回日本皮膚科学会総会, 横浜, 2015年5月29 - 31日.
16. 塩原哲夫:重症薬疹におけるIVIGの有用性. 第114回日本皮膚科学会総会, 横浜, 2015年5月29 - 31日.
17. 塩原哲夫:ステロイドの内服・全身投与の使い方再考, 総括. 第114回日本皮膚科学会総会, 横浜, 平成27年5月30日.

大山 学

【2016年度】

1. 川野貴代、佐藤洋平、加藤峰幸、早川順、大山 学:ニボルマブからベムラフェニブに変更し皮疹出現後も継続投与可能であった悪性黒色腫の1例. 第32回日本皮膚悪性腫瘍学会学術大会、鹿児島 (2016.5.27)
2. 加藤峰幸、新田桐子、狩野葉子、大山学、山田昌和:偽膜形成の眼症状からステイブンス・ジョンソン症候群を考えた塩酸フェニレフリン点眼剤による接触皮膚炎の一例. 第46回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会、東京 (2016.10.30)
3. Ryo Takahashi, Yohei Sato, Momoko Kimishima, Tetsuo Shiohara, and Manabu

Ohyama: Impact of therapeutic PD-1 blockade on T cell profile in advanced malignant melanoma: a possible link between PD-1⁺CD4⁺ cell and prognosis, 41st The 41st Annual meeting of the Japanese society for investigative dermatology, 仙台 (2016.12.11)

小豆澤宏明

【2014年度】

1. 清原英司, 小豆澤宏明, 片山一朗; 手掌に繰り返す紅斑と水疱を引き起こしたアセトアミノフェンによる固定薬疹. 日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会. 仙台, 平成26年11月22日.
2. 藤盛裕梨, 吉岡華子, 小豆澤宏明, 片山一朗; スピール膏貼付にて蕁麻疹が誘発されたアスピリン不耐症の1例. 日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会. 仙台, 平成26年11月22日.
3. 出口彩香, 田中文, 山岡俊文, 小豆澤宏明, 片山一朗, 杉尾勇太; 急性汎発性発疹性膿疱症(AGEP)様の皮疹を呈した薬剤過敏症候群(DIHS)の1例. 日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会. 仙台, 平成26年11月22日.
4. 山賀康右(大阪大学), 花房崇明, 小豆澤宏明, 片山一朗, 小林真紀, 橋本直哉; ベバシズマブが誘因と考えられた Perforating dermatosisの1例. 日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会. 仙台, 平成26年11月22日.
5. Hiroaki Azukizawa, Kenichi Kato, Ichiro Katayama: Analysis of B cell subsets in severe cutaneous adverse reaction. The 6th Drug Hypersensitivity Meeting. Bern, Switzerland, April 9-12th 2014.

【2015年度】

1. 加藤健一, 小豆澤 宏明, 片山 一朗 UVBからUVA領域で紅斑反応を認めたアミオダロンによる光線過敏症の1例 日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会 平成27年11月21日 松江

G. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む。)

1.特許取得
なし

2.実用新案登録
なし

3.その他
なし

